
cherry blossoms

無月藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

cherry blossoms

【Nコード】

N3131B

【作者名】

無月藍

【あらすじ】

クラスで、「氷河佐伯」と呼ばれている、佐伯綾。15歳。同じクラスで、美女と付き合っていたと噂の、春巳朔良。15歳。ある日の午後。二人は校門横の桜の木の下で出逢った。その出逢いで、綾と朔良は変わっていく。「大好き」でも「嘘でも友達続けるって、決めた」そんな矛盾した心の交叉するラブストーリー。

綾―桜の下で―（前書き）

この作品は、「小説&まんが投稿屋」の、作家、堇が書いた小説、「cherry blossoms」と多少の修正等以外は同じ作品です。

綾―桜の下で―

―さあっ

少し強い風が吹く。

私の隣にある桜の木は、風で枝を揺らし、桜吹雪を創る。

私は、風で少し乱れた背中まである髪を手櫛で直す。

―さあっ

また風が吹いて、桜の花びらが舞う。

その花びらは、とても綺麗で切なくなる。

（いつかは全部散ってしまうんだよね…。どんなに綺麗でも、どんなに丈夫でも。）

私はふとそう思った。

「恋なんて、脆いんだからすぐ消えてしまうよ。」

小さな声で呟いた。

私は1ヶ月に、失恋した。理由なんて簡単。

「好きな子が出来たから、別れてくれないか…。」

仁が私に向けて言い放った、最後の言葉。

私は何も言わずに肯いた。

「あ！佐伯さん。手紙を出した！町野です！よかったら付き合ってください！！」

それを言ったのは仁だった。

私はその時もコクリと肯いた。別に好きじゃなかったけれど、断わらなくても別に何も支障は無いから、私は肯いた。

結局、1ヶ月で散った：私と仁の恋。

「何か暖かいものを『私は』1ヶ月間感じていたのに」
私たちは別れた。

その別れを切り出されたのが、この桜の木の下だった。その時はまだ桜の花は咲いていなくて、小さな小さなつぼみだったけれど、ほのかにピンク色づいていてとても綺麗だった。

ジャリ：

足音がした…。私じゃない人間の。

私はそれに驚いた。ここに通うようになってから、まだ一度も人がここに來たことが無いからだった。

（誰か來たの？）

さああっ

風が吹いて、また桜吹雪になる。

次の瞬間、桜吹雪が治まるとそこには一人の男子生徒が立っていた。

私はとっさに、疑問を言う。

「あなた…誰？」

「君こそ…誰？」

私たちは顔を見合わせる。

（まあ、此処は私だけの場所じゃないしね…人が来て当たり前だよね。）

「俺は、2年3組の春巳 朔良…だけど。…………あれ、君どこかで…？」

「…………思い出した。私と同じクラスじゃない？」

「あ！そうだ！確か君は佐伯 綾ちゃん…だったよな？」

「うん。よく覚えてたね。クラスに30人も居るのに。」

「俺、名前覚えるのは早いから。」

私たちは3秒ほど沈黙する。

「どうして…ここに？」

春巳君は言った。

「なんとなく。じゃ駄目？」

「いや…。」

私は、いつもこんな口調だ。皆からはクールと思われているようで「氷河佐伯」とか裏で呼ばれている。実際そうなのだろうけれど、私は全く気に入らない。

「じゃあ、あなたは？ どうして此処に？」

「俺は…彼女に振られたから…。」

さあっ

ピンク色の桜の花びらが舞う。

春巳君は、悲しいような…苦しいような…そんな表情をした。
私は聞かないほうがよかったと、

―後悔した。

綾―桜の下で―（後書き）

さて、第一部分が終わりました。

綾の辛い気持ちがあまく伝わっていればいいですが…。

感想の方、ぜひよろしくお願いいたします。

朔良―宣告の後で―

「亜由美く！」

俺は、校門の前で俺を待っていた「彼女の」亜由美に手を振る。校門横には、大きなつばみを付けた桜の木が、俺を見下ろしていた。

「どうしたんだよ、亜由美。こんなところで。」

「あ…あ…と。」

少し赤くなって、亜由美は下を向いた。

周りには、俺たちをじろじろと見る学校生でいっぱいだ。

「仕方ないな…。亜由美、俺の教室行こうよ。今人居ねえから。」

俺は亜由美の手を引くと、亜由美がついて来れそうな速度で、教室まで走った。

「あ…ちよ…！朔良君っ…！！」

俺は教室の前に着くと、亜由美に大丈夫？と一声かけた。こくん。

亜由美が頷いたので、俺は少しほっとして笑った。

俺は教室のドアを開けると、俺の隣にある席の椅子を少し引いて、亜由美を座らせてから、自分の席に座った。

「で…どうしたんだよ？急に俺呼び出して。」

……………。

亜由美は答えない。

「な、亜由美。言いたくなきゃ別にいいんだぜ？」

俺は笑って言う。

いつも亜由美は言いたいことを整理するのが苦手のように、話すときはいつも少し戸惑うのだ。

俺は椅子から立ち上がった…次の瞬間。

亜由美は俺の服の袖を掴んだ。

「違うのっ。今…言いたいものっ…。」

「…。分かった…。」

亜由美は下を向いて、手はふるふると震えている。

俺は静に椅子に座り直す。

「大丈夫か？ 亜由美…、言えるか？」

「だい…じょぶ…。」

亜由美はゆっくり深呼吸をする。そして唇を噛み締めた。

「あの…別れて下さい…。」

俺の全身が凍りつく。顔は眉間にしわを寄せたまま、動かない。
…そんなことが、自分でよく分かった。

（俺たち、別れないって言った。亜由美が…俺の告白を聞いてくれたとき…すっげえ嬉しかったのに…）

俺の心の中は…絶望感に襲われていた。

亜由美は、下を向き、嗚咽を漏らしながら泣いている…。ひざの上に乗せている、すらっとした白い手は、ぎゅっと握り締めている。

俺は、やっとのことで咽喉から一つの言葉を繰り出した。

「嘘って言えよ。」

亜由美は、次の瞬間大声で泣き始め、急いで教室を出て行った。

「嘘って言えよ！ なあ亜由美！！ 亜由美ーっ！！」

教室から出て行く亜由美に…俺は叫んだ。

—あれから、1ヶ月。

俺はふと、あの校門の横にあった桜の木を思い出した。

「亜由美…。」

俺が桜の木の前まで来ると、何か人影が見えた。

—さあっ

桜吹雪が舞ったが、すぐにやんだ。

桜の下には、女の子が居た。

「あなた…誰？」

その子は突然聞く。

「君こそ…誰？」

俺も同じことを言う。

沈黙が続く…。

沈黙をしても仕方ないので、俺は自己紹介をする。

「俺は、2年3組の春巳 朔良…だけど。…………あれ、君どこかで…？」

なぜだろう？ やっぱりどこかで見たことある顔なのだ…。

「……思い出した。私と同じクラスじゃない？」

「あ！ そうだ！ 確か君は佐伯 綾ちゃん…だったよな？」

俺は名前と顔を一致させた。

「うん。よく覚えてたね。クラスに30人も居るのに。」

「俺、名前覚えるのは早いから。」

俺たちはまた沈黙する…。

「どうして…ここに？」

俺は、何気なく聞いた。

「なんとなく。じゃ駄目？」

「いや…。」

俺はそんなにさらりと言うとは思わず、少し戸惑った。…亜由美で慣れてしまったからだ。

「じゃあ、あなたは？どうして此处に？」

「俺は…彼女に振られたから…。」

さあっ

桃色の花びらが、僕たちの周りを舞う。

なあ

亜由美を

思い出させないでくれ

綾―後悔の後で―

「あ…。春巳君…ごめんなさい…。私悪いこと言っちゃった…。よね…。」

そう言おうとした。

「へえ。ふられちゃったんだ。馬鹿みたい。」

実際に出た言葉は、これだった。

私とその言葉を発した後、春巳君は凄く傷ついた顔をした。

―私は…、下を向く。

（やっぱり私は馬鹿だ…、何でこんな事言うんだろ…。）

こんなことを言えば…、氷河佐伯と呼ばれても仕方が無い。と思った。

「何だよ…。」

「え…?」

「何でお前にそんなこと言われなきゃいけないの!?!」

―ほら、傷ついた。…傷つけた。

「聞こえたの? 独り言のつもりだったんだけど。」

とまらない

「ふざけんな! 謝れよ!」

いつもの態度が

「謝ればいいの? …ごめんなさい。これでいいでしょう?」

癖になってる

「本当に謝ってんのかよ!」

本当に

「何であなたに本気で謝らなきゃいけないの?」

―とまらない…。

「もうお前ふざけるなよ！人の気持ち…考えろよ！」

（考えてるよ。言葉が出ないだけ。）

「おい！無視かよ！！佐伯っ！」

春巳君は私の服の胸倉を、手の筋が浮き出るほど強く、掴んだ。

（別に怖くないし。）

「……………何？」

私は、とまらなくなっていた…。

春巳君を狐のように睨み返し、胸の手を叩いた。

春巳君の表情が、凍りつく。私がまさかこんなことをするとは思っていなかったのだろう。

「ふざけるな…！」

春巳君は、本当に怒っている。

「ふざけて、無い。」

春巳君は、私の顔を見ると胸倉を離した。

「佐伯…、お前見損なった！」

また、いつものように突き放される。

（これでいいんだ。）

（突き放されるほうが、春巳君の為にも良い。）

—さあっ

また、桜吹雪。

私は、後二、三ヶ月で、この学校から離れるだろう。

でもそれは当たり前のこと。いつものこと。

私のお父さんは、治療法がまだ見つかっていない病気にかかっている。だが、治療法が7割分かっていう、病気なのだ。

だから…、ある病院から突き放されては、見てあげましよう病院からお声がかかる。

病院は、自分たちの病院が金持ちになるため、注目される為にお

父さんを利用する。

お母さんは、お父さんのことしか考えていない。だから、一人っ子の私のことを何も考えずに、簡単に転校するわよ。と言う。

それも、転校する一週間前に言う。

だから、疲れてしまった。

私は、小学校五年生の時初めて人を突き放した。

それから二ヶ月して、すぐ転校したけど、ぜんぜん辛くなかったし、あっちも辛くなかっただろう。

だから、私はその時から人を突き放すことを癖にして生きて来た。それが楽なのだ。

それでいい。

見捨てれば、楽になる。

思い出なんかに要らないから、代わりに楽にならせて。

辛さなんてなくして欲しい。

春巳君を見捨てれば、楽になる。

仁を忘れれば、楽になる。

朔良―出逢いの後で―

俺の目の前に居る、佐伯は下を向いた。表情は分からないけど、きつというろ考えているのだろう。

俺がそう思った瞬間。

「へえ。ふられちゃったんだ。馬鹿みたい。」
言われたくない、一言。

その一言は、俺の心を血が出るかと、そう思うほど傷つけた。
（お前に、俺の気持ちが分かるかよ！）

唇を、噛み締めて、涙を、抑えた。

「何だよ…。」

自分でも情けないほど、小さな声でつぶやいた。

「え…？」

「何でお前にそんなこと言われなきゃいけないの！？」

佐伯…は、小さく口角を上げた…。ように見えた。

「聞こえたの？独り言のつもりだったんだけど。」

（誤れよ！人を傷つけてっ！）

「ふざけんな！誤れよ！」

佐伯は汚いものを見るように、俺を、見ているように見える。

「誤ればいいの？…ごめんなさい。これでいいでしょう？」

（お前につ！俺の傷ついた心分かんのかっ！）

俺は拳を握り締めた。下唇は噛み過ぎて少し血が出ている。

「本当に誤ってんのかよ！」

最後に、来た言葉は。

「何であなたに本気で謝らなきゃいけないの？」

氷柱のように、鋭くて。俺の心に突き刺さった。

佐伯は俺を見ず、桜の木を見ていた。

（俺より、桜の相手すんのかよ！）

「もうお前ふざけるなよ！人の気持ち…考えろよ！」

佐伯は、そういつても俺を見ず、手の上にのった桜の花びらを見ている。目は、死んでいた…。

俺は真剣に、涙を止めて佐伯に言った。

「おい！無視かよ！！佐伯っ！」

俺は絶えられなくなって、佐伯の胸倉を掴んだ。

（殴りたい！この顔を、ボコボコにしてやりたいっ！）

俺はそんなことを思うほど、イラついていた。

「……………何？」

そう一言佐伯は言うのと、俺に殺気を感じさせるほど睨んだ後、胸倉を掴んだ手を…はたかれた。

（そんなこと…。するのかよ…。）

俺の表情はきつと凍っている。視界が少しぼやける。

―涙が溢れかけた。

本当に、殺したい。そんなことすら考えかけた。

「ふざけるな…！」

俺は、ここまで起こしたのは初めてだった。それほど俺は、温厚だと思ふしあまり嫌な事も言われなかったが。

佐伯のお陰で、何かが切れた。

「ふざけて、無い。」

―馬鹿だな。俺。こんな奴の相手してたのかよ。

俺は佐伯の胸倉を放す。

「佐伯…、お前見損なっただ！」

殴ろうと思っていた自分に、少し笑ってしまった。

（こんな奴の相手、する価値なんてチリ一つねえよ。）

俺は、佐伯を全く見ず、教室へ走った。

家に帰った後も、佐伯に言われた事が全て胸に刺さって、
ナミダが、カレタ。

綾―教室の中で―

『佐伯、お前見損なった』

確かそんなことを言っていた、あの春巳という男は…。

私は、そんなことを考えていた。

（どうせもうここから転校するんだから、あんな男の事なんて。）

私にとって、春巳君のことは本当にどうでもよかった。

いつも突き放す奴らと一緒に。

私に興味本位で近づいて、私の性格にムカついて、何処かへ行く。

…皆、一緒。

私が空想にふけていると、クラスの男子が二、三人こちらへ来た。

「どうかした？私に用？」

「授業終わったら、屋上に来てほしい。」

クラスで一番背の高い、確か：明石という名前の男は言った。頬が少し赤い。後ろにいる二人の男はニヤニヤしている。そういえば、明石はあの身長なので、バスケットをしている。それがなかなか上手いし、ルックスもいいので、女子からモテているようだ。

まあそんなこと私にはチリ一つ関係ないが。

（気持ち悪い。けど、別に断わる理由は無いし…。）

「分かった。行く。」

私がそう返事をした瞬間、がらりと教室のドアが開いた。先生だった。

「さあ、席に着け。数学だ。」

中学三年生の、受験勉強から解放された私たちは、何気なく精神的にゆとりがあったが、勉強はそうはいかなかった。

毎日の復習がかかせないほどで、生徒たちは真剣に勉強している。私は、春巳君を、チラリと横目で見ると、春巳君はこちらに気付いたのか、私を見る。私はすぐに目を逸らし、黒板に目を向

けた。

「ばいばーい。」「また明日ね。」「じゃあねえー。」

そんな別れのあいさつが飛び交う中、先ほどの三人の一人。明石は帰る人の波を逆らって、私に向かって歩いて来た。何人かの女子が私を睨みつける。

しばらくして、人の気配が無くなると明石は、

「佐伯、行こう。」
と言った。

私は小さく頷くと、席を立ち、明石の後ろをゆっくりと付いて行く。どうやら明石は私のために歩幅をあわせているようだ。

「明石。」

「え…。」

振り向いた明石の頬は、少し赤みがかかっていたが、気にせずこういった。

「ねえ、歩数合わせてるの？ わざわざ。別にいい。そんな事しなくても。少し、うっとおしい。」

「あ、ごめん。」

明石は私の一言を受けた後、歩幅を大きくした。背丈が大きいため、一歩がかなり大きく、私は少しずつ遅れていったが、気にせず自分のペースで歩いていく。すると明石は、わざわざ私を何回も見てくる。気持ちが悪かった。

しばらく歩くと、屋上の階段が現れた。そこを明石は二段飛ばし。私は一段一段上がって行った。

ガチャリ

明石が屋上の扉を開ける。風がひゅうひゅうと鳴り、少し肌寒い。屋上は体育館の半分ぐらいのスペースで、外側にはしっかりフェンスが設置してある。そして、そのフェンスも越えられないよう、高

さが2、3mある。そのうえフェンスは、二段階あり、それらのフェンス超えなければ下に飛び降りられない。

「あ、のさ。」

私がフェンスを見ていると、突然明石は切り出してきた。

「何？」

「突然で、ごめん。俺佐伯が好きだ。付き合って欲しい。」

風がひゅうひゅうと鳴る。私の長い髪の毛は、ばさばさと音を立てて暴れる。

―コクン

私は頷いた。すると次の瞬間、明石は私に抱きついてきた。

「きゃっ！な、何するの！離して！」

すると、明石は正気に戻ったのか、急に離して謝ってきた。

「次したらあなたのこと絶対許さないから。…帰る。」

「ま、待てよ。一緒に帰ろう。」

明石は、な？と最後に一言付け加えて、私に言う。

「絶対、嫌。」

私は走って階段を下りると、すぐに教室に戻る。

すると、そこに春巳君がいた。自分の机の上に座っている。

「また会ったな。」

「ええ。」

「お前告白されたんだろ。明石から。」

「ええ。それがどうかしたの？」

そんな事、春巳君には関係ないのに。どうしてそんなことを聞くの？

「いや、別に。」

春巳君は、机から降りるところ言った。

「明日から学校来るな。」

「何で。」

「言わなきゃいけないか。」

「別に。いいけど。助言でもするつもりなの？」

「：お前、明日から虐められるぞ。明石のファンにさ：。」

「別に、かまわない。」

私は別にそんなことでくたばる人間じゃないし、そんなことはどうでもいい。

「何で！お前教科書捨てられたりとか、無視されたりとかするんだぞ！？」

「かまわない、と言ったよ。」

私は窓から空を見る。

「私はそんなことで、死んだりしない。」

振り向いて春巳君を見ると、悲しい顔をしている。

「佐伯：。お前：。」

「春巳君は、きっと分からないよ。悲しみに慣れた人間の気持ちは。」

「

私は、明石が居なくなったのを確認して、教室を出た。

早く突き放さなければ、またあの時のように悲しみを引きずるのは嫌。

楽で居させて欲しい…。

朔良―飛び交う悪意の中で―

（アイツに、何が分かる…！）

俺は、とにかく腹が立っていた。あんな女に、何も知らない女に言われた言葉が。あの日から、もう三日も経っているのに、まだあの言葉が耳から離れない。

―「へえ。ふられちゃったんだ。馬鹿みたい。」

たった一言の佐伯の言葉は、俺の心を今でも鷲掴みにする。とても、言葉では言い表せない痛みだった。

俺は教室のドアを開ける。おはようと言う言葉が俺に向かって飛んでくる。あいさつをくれた人に小さな声でおはようと言うと、数人の女子がキヤアと叫ぶ。うるさいと思いつつ、重い足取りで自分の席へつく。

何気なく、佐伯に目をやると椅子に座ってぼおっと窓の外を見ている。すると、そこに三人の男子が近づく。

「どうかした？私に用？」

佐伯の感情の無い声が、ここにまで届く。

「授業終わったら、屋上に来てほしい。」

そう言ったのは、このクラスで俺の次にモテている明石 勇人だった。明石は女子には人気があるのだが、男子にはキツイ態度をとるので嫌われている。女子に好かれようとしているのが、男子には見え見えなのだが、それを女子に言うことを男子は出来ない。嘔吐き呼ばわりされるからだ。

そんな明石についている二人の男子は明石に憧れて一緒に居るらしい。一応彼女は居るが、明石に近づこうと目当てに付き合っているに過ぎない。

（行くのか？こんな馬鹿な野郎のところ？）

俺は、佐伯がもし明石のところに行くなら、止めてやろうか…と少し考えたが、頭で揉み消した。そんなことする必要がある人間だ

と思えないからだった。

「分かった。行く。」

（行くのか…。）

「さあ、席に着け。数学だ。」

それから授業をしていたことは、覚えているが何をしていたかは全く覚えていない…。

「ねえ、春巳くうくん！」

「朔良あゝ！一緒に話そつ。」

女子の甘ったるい声が聞こえてきて、授業が終わったことがやっ
と分かる。

「どうしたんだ？」

何事も無かったように、俺は女子たちの相手をする。うわべは笑顔だが、かなりウザイと思いつつ話す。毎回女子を見るだびイライラする。亜由美だけは別だったが…。

「あのね、私の友達明石君が好きだったんだけど、今朝、氷河佐伯と話してるの見て泣いてたんだよ！ありえないよ。どうせネクラなのね！」

「本当だよ！あんなネクラ女死んじゃえば良いのに。」

「虐めちゃう？？」

「虐めちゃう！！」

次々と俺の目の前を何気なく飛び交う、言葉。その一つ一つに悪意があることに周りで聞いている人間が気付いているだろうが、止められない。逆に標的にされてしまうからだ。俺は分からないが。

「…こんな話、盛り上がらないし…。剛！有紀！彰！真澄！京介！バスケの3オン3やろうぜ！」

俺は、何気なく話を逸らす。これ以上こんな話題は聞きたくなかった。

俺たちが、バスケットコートへ行くと、明石たちがすでに1コート使っていた。二コートあるので別に関係は無いのだが。

「さ、春巳。やろうぜ！」

剛が陽気な声を出す。俺たちはグッパをして、二チームに分かれる。コートの外で女子のキャアという声がまた聞こえてきた。それが俺たちへの声か明石たちへの声かは分からないが。

「お、あっちもやるのか：バスケ。」

隣のコートから、明石の声が聞こえてきた。

（黙っとけ。）

俺は心の中でそう言葉を吐き捨てると、バスケを開始する。

「先輩、ちょっといいですか？」

明石の声が聞こえてくる…。

ドンドン…。

ドリブルしながら、ゴールに近づく。

「何だ？」

「今日俺。告白するんですけど…：どうしたら上手くいきますかね？」

ドンドン…：ガシャン！

俺はダンクシュートを決めた…。けれど隣のコートの会話が気になって集中出来ない。

「まあ、当たって砕けろ。上手く言ったら抱きつけ。」

「そんなことするんすか！！」

明石は顔を真っ赤に染めて、先輩らしき人間に言った。

「おい、朔良すげえじゃん！ダンク決めちゃってよお！」

「あ、ああ。」

俺は、それからなぜか集中出来なかった…。

「ばいばいー！」 「またね！」

帰宅の時間だ。クラスの4／3は部活やクラブに没頭する。俺は

帰宅部だが、スポーツ部に勧誘されたりする。入る気は無いが。

俺は何気なく、テニスコートに居た。

「あれ？春巳君帰らないの？」

いつも追っかけてくる子が俺に声をかけてくる。

「ちよっとね。」

「そっか、余り遅くならないように帰りなよー。部活はいつてないんだしね。」

優しい言葉だった。まるで、亜由美のような…優しい言葉だった。けれど、これは仮面を被っているに過ぎないんだと思った。今日あった出来事を考えなおしてみたら、誰でも人を信じれなくなると思うのは、俺だけだろうか。

暫らくして教室に帰ると、カバンに教科書を詰めた。

―タツタツタツ。

遠くから誰か走ってくるのに、俺は何も気付かず、机に座ってぼーっとしていた。けれど、段々と近づく音にやっと気付いた時、その足音が佐伯だと気付いた。

「また会ったな。」

「ええ。」

「お前告白されたんだろ。明石から。」

「ええ。それがどうかしたの？」

何故か、それが気になっていた…。

「いいや、別に。」

別に、では無い筈だった。虐められると教えてあげたほうがいいだろう…そんな考えが頭の中でぐるぐる回る。

……。

「明日から学校来るな。」

（何で言ったんだ、こんな女に…。）

「何で。」

「言わなきゃいけないか。」

言いたく無かった。なぜか恥ずかしかった。

「別に。いいけど。助言でもするつもりなの？」

「…お前、明日から虐められるぞ。明石のファンにさ…。」

「別に、かまわない。」

「何で！お前教科書捨てられたりとか、無視されたりとかするんだぞ！？」

（だから…なんでこんな女に…。）

自分に、腹が立った。

「かまわない、と言ったよ。」

佐伯は、空を見る…。俺があの時見た、あの死んだ、眼で。

「私はそんなことで、死んだりしない。」

（どれぐらい、強い女なんだよ…お前は。）

「佐伯…。お前…。」

「春巳君は、きつと分からないよ。悲しみに慣れた人間の気持ちは。」

俺は、何かに悲しくなって…、カバンを持って教室を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3131b/>

cherry blossoms

2010年11月14日14時47分発行